

いのちに驚く対話

死に直面する人と、
私たちは何を語り合えるのか

岡田圭=著

定価2,420円(本体2,200円+税10%)

医学書院 ☎03-3817-5600



これは医学書というよりは芸術書だ

医療法人社団悠翔会理事長・診療部長／医師

佐々木淳

著者と患者の対話はまるで即興のダンス

ページをめくるたびに、いや一文字ごとに新しい気づきがある。美しい表現でありながら、無駄な修飾のない研ぎ澄まされた文章。

最初の10ページを読めば、この本が特別なものであることが分かるはずだ。その深淵をくみ取るために一つの行を何度も往復した。

これだけ時間をかけて読んだ本は初めてだ。

エンドオブライフケアを語る本はたくさんある。内容はどれも重複している。そこにはたくさんのプラスティックワードが溢れる。フレームワークはなんとなく理解できても、具体的なイメージが伴わない。

本書は全く違う。固有名詞を除くとカタカナ語が一つも出てこない。丁寧に吟味された一つひとつの言葉が読者を一人称の世界に誘い込む。

どのような厳しい局面にあっても、人には希望を見いだす力がある。著者はそんな力を

信じて、患者さんの置かれた状況に独自性

のある解釈を提案する。時に患者さんの横たわるベッドは人生を漂う「船」となり、わずかな余命を生きる患者に「家族の心に花を咲かせるための物語の種を探しに」いこうと誘う。そこから生まれる対話は、まるで即興のダンスを見ているようだ。その美しさに時に目頭が熱くなる。

対話を通じて、患者さんは自分の本当の気持ちを探し始める。大切な人たちの関係性に気づき、いまこの瞬間の意味を見いだす。もはや何かと戦う必要はない、ただ「在る」だけでいい。そして怒りや不安、焦燥、無力感から解放されていく。佐藤伸彦先生(医療法人社団ナラティブホーム理事長)の話と重なる。

読みながらはたと気づいた。実は自分自身も大きな苦悩とともに生きていたのだということ。自然にこぼれてきた涙は、著者と患者さんの感動的なエピソードに対してではなく、自分自身の苦悩に対する気づきと許しとの徴候だったのだと。著者との対話を通じて、僕自身も癒されていたのだ。

人生の最終段階の支援に関わる可能性のあるすべての人にとって、必読の書

医療にはサイエンスとアートの二つの側面があるとされる。

サイエンスを学ぶための素材は無数にある。しかし、医療におけるアートとは何なのか。それを初めて理解できたような気がする。そして、サイエンスだけでは医療やケアは完結しないということを改めて思い知らされる。本書は人生の最終段階の支援に関わる可能性のあるすべての人にとって、必読の書と言って過言ではない。

生命＝生物学的な命とは異なる、その人の存在としての「いのち」のたねやかな可塑性と限りなく広がる世界観。それを封印してしまうのか、それともうまく引き出すことができるのか。対人援助職に求められる対話の力、そしてその前提条件としての信頼関係の構築。言葉を選ぶ前に、まずは相手を「感じる」こと。本書の後半にはさまざまな「即興のダンス」が描かれる一方、前半にはそのダンスの基本、私たちがながいがしろにしがちな対話の原則が丁寧に記されている。

私たち専門職が提供すべき本当の価値は何なのか。

そして患者が求めているものは何なのか。これほど鮮やかにケアの本質を描き出した文章は他にない。